「仏教民俗研究会」前後

坂本　要

仏教民俗研究会（坂本要主催）は一九七三（昭和四十八）年十一月に東京教育大学で発足した。一九七五（昭和五十）年、雑誌『仏教民俗研究』を創刊し、以後第七号まで発行した。研究会は休会を挟み断続的に一六六回の研究会を催し、二〇〇八（平成二十）年五月を最後に名称のみを残し活動を停止した。この報告は発足当時の仏教民俗研究の動向と発足に至る状況及び仏教民俗研究会の活動記録を記したものである。

一　仏教民俗（五来重）

「仏教民俗」「仏教民俗学」の語を公にしたのは、当時高野山大学の教授であった五来重である。一九五二（昭和二十七）年三月に高野山大学歴史研究会発行の雑誌『仏教民俗』第一号に「仏教と民俗」と題した論文を載せた。それより以前「仏教習俗」という語で盆のことを論じている。[1] また前年に「日本仏教民俗史」という講義を始めている。「仏教と民俗」の論の中で「日本仏教の特質」「日本仏教と仏教民俗学」「仏教と常民」という節を設け、日本仏教の中での仏教民俗、（次の論考では「民俗性」という語を使用するが）を位置づけようとしている。「仏教と常民」は後に「庶民仏教」という言葉になるが、仏教史の中で仏教教理史・制度史のみの日本仏教研究に対するア

ンチテーゼであった。仏教民俗を語る具体例は卒塔婆の事例であるが、この論考の「むすび」に「日本仏教民俗学」の構想を掲げ、研究対象の一覧を載せている。

雑誌『仏教民俗』第二号には「仏教儀礼の民俗性」として修正会・修二会を取りあげ、仏教儀礼に民俗が入り込んでいることを論じている。

「仏教民俗」が民俗学の一分野として位置づけられ「はばかることなく、公然と唱え、その定義づけを行った」[2]のは『日本民俗学体系　第八巻　民俗と信仰』（平凡社、一九五九〔昭和三十四〕年）で、「仏教民俗学の対象」は「日本仏教民俗学」の構想より大幅に増えている。その後五来重は博士論文「日本仏教民俗学論攷」を提出し、その序論に仏教民俗学の方法・研究史・対象・日本仏教史での位置づけを述べ、仏教民俗学の体系化を図った[3]。

五来重にとっての仏教民俗学は「日本仏教の特質」「日本仏教と仏教民俗学」とあるように日本仏教史の中に仏教民俗を位置づけることで、それが庶民仏教を明らかにするということが当初の考えに強くあった。

五来重は一九五五（昭和三十）年大谷大学に籍を移し、大谷大学国史学会等[4]で後輩の指導をし、また元興寺文化財研究所で仏教民俗の史料研究にあたった。以降著作は多数に及ぶが、一九八〇（昭和五十五）年『講座　日本の民俗宗教　第二巻』（弘文堂刊）に「仏教民俗学」を編集し、「総説――仏教民俗学の概念――」を執筆する。この文で「仏教民俗は偽物仏教かもしれないが庶民の要求したものである。その成立に聖の関与した」ことなどが述べられる。ここでも正当仏教に対するアンチテーゼとして仏教民俗を論じている。

二　仏教民俗学会（大正大学）

一方大正大学でも仏教民俗に関する研究の機運がたかまっていた。地蔵信仰の研究を進めていた星野俊英を中心

に中村康隆・加藤章一・他のメンバーが集まり東京都檜原村調査を機に一九五六（昭和三十一）年六月に仏教民俗学会を発足させた。大正大学に拠を置き五来重・原田敏明とも連絡を取った。[5]

趣意書によれば発会に二つの理由を掲げている。一つは教理体系や教団制度等に眼を奪われていた従来の仏教研究に対し、民間習俗の実際面に生活感情と結びついている仏教を研究する必要を述べている。二つ目は従来の日本民俗学において仏教的信仰行事を固有信仰に還元して解釈している。が、仏教による民俗の変貌・適応・止揚は文化変容の積極的な様相・新しい文化統合としてとらえる必要があるという主張である。一つ目は五来重同様、仏教および仏教史研究の欠落している部分を補完するということであるが、二つ目は後述する柳田民俗学の固有信仰論の批判でもある。

学会は東京都三多摩地区の調査に続いて埼玉県の飯能・名栗地区の調査も計画した。寄稿者としては櫛田良洪・吉岡義豊等の大正大学教官にくわえて木村礎・三吉朋十・伊藤曙覧・井之口章次・佐藤米司等の石仏や民俗の研究者を幅広く募った。概して石造物の論が多い。学会誌は十七号（一九八一〔昭和五十六〕年）まで続く。学会発足二十周年に中村康隆編『仏教民俗の領域』（国書刊行会・一九七八）と三十周年に『仏教民俗辞典』（新人物往来社刊・一九九三）を出している。

三　柳田民俗学批判

柳田國男は日本民俗学を樹立したが、その独自性から柳田民俗学と限定的に述べられるようになってきている。柳田國男の著作の全貌が分かったのは一九六二（昭和三十七）年の死の前年に刊行が開始された『定本　柳田國男集　全三一巻＋別巻五巻』（筑摩書房、一九六二～六四年）で、その時点で柳田國男論が始まる。橋川文三・後藤

総一郎・神島二郎などの政治学からのアプローチで、後藤総一郎・神島二郎は柳田の使用する「常民」の語を以って肯定的評価を行った。一九七三（昭和四十八）年には『季刊　柳田國男研究』（白鯨社刊）が刊行され[6]、民俗学・文化人類学ブームのさなか、柳田國男論にも熱が入った[7]。

その後柳田の築いた民俗学に対して批判も起こるようになった。その一つが、後に「祖霊神学」と揶揄された『先祖の話』（一九四六〔昭和二十一〕年、筑摩書房刊）で歳神や田の神・山の神等の民俗神をイエの神である祖霊に一元化するというものであった。その中で仏教が流入する以前、外国の影響前の信仰を「固有信仰」として多用している。特に盆と正月は年二回の先祖のみたまを祀る行事であったが盆行事は仏教の影響で仏事になってしまったとしている。柳田は兵庫県福崎町辻川の神官の家の出でもあることもあり、初期の著作には聖や巫女・修験の民間宗教者の研究が多いが、民俗信仰の体系をなすにあたって、神道的色彩が強まった。葬墓制以外の仏教民俗的研究の遅れは柳田の個人的資質によるとされる。

前述の大正大学の仏教民俗学会の設立趣意書にもそのことが書かれており。柳田民俗学批判の一つとして仏教的側面の欠落が指摘されている。したがって日本人の民俗信仰の全体把握は仏教民俗を補完して可能になる。また設立趣意書にあるように仏教民俗は固有信仰論に立つのではなく混交・変容・統合などのダイナミズムの中に実態を求めるものであるといえよう。

四　その後の五来重

そのいう中にあって五来重の仏教民俗は聖研究・修験道研究に多大な成果をもたらす。特に修験道の研究では『山岳宗教史研究叢書　全一八巻』（名著出版、一九七五～一九八四年）の刊行が大きい。しかし『講座　日本の民俗

宗教　第二巻　仏教民俗学』（一九八〇年刊）の編集以降仏教民俗学のことは口にしなくなる。

それ以前に仏教民俗をめぐって次のようなやりとりがあった。五来重は宮田登著の『日本の民俗学』（講談社学術文庫、一九八五〔昭和六十〕年）[8]の仏教民俗の項に仏教民俗を否定するようなことが書かれたと『仏教と民俗』（角川選書、一九八三〔昭和五十八〕年）の「あとがき」で非難した。この仏教民俗は私の主催する仏教民俗研究会のシンポジウム発表原稿を会誌四号に載せたもので、シンポジウム会場では柳田國男仏教関係論文目録と五来重「仏教民俗学の構想」が資料として配られた。それを受けて宮田登は仏教民俗にはすでに日本民俗学の中に含まれているのではないか。ことさら仏教民俗といわなくてもいいのではないか。と疑問を投げかけた。五来重はこのことに異議を唱えたものであるが、一方宮田登は五来重の構想の中に従来の民俗学で扱われていない項目もあり、五来重の考えも首肯でき、仏教民俗の資料の再検討と整理の必要を述べた。五来重は自ら標榜した仏教民俗を言葉尻で否定されたことに嫌悪感を持ったのであろう。その後、藤井正雄が中に入り「仏教と民俗のあいだ」という三者の座談会を開き、『歴史公論』五十二号に掲載される。[9]

話は五来重に戻るが、五来重は一九七七（昭和五十二）年大谷大学に日本宗教研究所が開設され初代所長になる。一九九〇（平成二）年宗教民俗研究会を組織し一九九一（平成三）年会誌『宗教民俗研究』を創刊する。その発刊の趣旨に仏教民俗学をふまえて、広く日本宗教の問題を「日本宗教民俗学」として扱うとしている。仏教民俗学を止揚させた形で宗教民俗学を考えていたようで、対象は日本に限るということである。

一九八二（昭和五十七）年の遠野で開かれた日本民俗学会年会で藤井正雄は仏教民俗に関する質問を五来重に投げかけたが、五来は答えずに「仏教民俗はすでに捨てた学問分野だから」の言を残して去った。[10]その後企画された『仏教民俗学体系』（名著出版、一九八六年から刊行）に五来重は参画していない。

五　東京教育大学史学方法論教室

さて仏教民俗研究会のことであるが、発足には以下の様ないきさつがある。

東京教育大学史学方法論教室は一九五二（昭和二十七）年に史学科共通の講座として開設し、当初教官のみであったが一九五八（昭和三十三）年より学生定員が認められ、考古学・民俗学に分けて専攻させた。民俗学は二名であった。概説・特論・演習・実習の他、民俗総合調査を行い、一九六六（昭和四十一）年まで九冊の民俗総合調査報告書を出している。[11] 一九七〇（昭和四十五）年大学院が新設民俗学・考古学の専修生を置いた。

この間の一九六三年（昭和三十八）年に東京教育大の筑波移転問題が起こり、教室は賛成・反対の二分に分かれた。時あたかも学生運動最盛期で教育大では移転反対闘争として一九六八（昭和四十三）年に学生の無期限ストライキが起こり、入試が中止され機動隊が導入された。筆者が大学院に入学した一九七〇年度には和歌森太郎の講義などは再開されていなかった。一九七三（昭和四十八）年十月に筑波大学が開学され、史学方法論教室でも廃学に伴い直江広治は筑波大へ、竹田旦は茨城大にと袂を分かった。[12]

廃学が一九七八（昭和五十三）年と決まり、学生は教育大での受講の機を奪われることになった。前述したようにこの期は民俗学・人類学のブームでもあり、また学生運動に伴って、若者による新たな文化の創造が叫ばれていた。このような機運のなか学生による研究会が各大学で湧出していた。特に教育大では廃学の危機にあり、学生・院生が各自の研究会を組織した。

福田アジヲ・上野和男が一九七一（昭和四十六）年に社会伝承研究会を結成し、一九七三（昭和四十八）年に雑誌『社会伝承研究』を出している。佐野賢治が山形県米沢の農村文化研究所の活動を中心に民具雑誌『我楽苦多』を

一九七四（昭和四十九）年にガリ版刷りで創刊する。宮本袈裟雄は鈴木正崇・谷口貢等と教育大での講読会から木曜会を一九七五（昭和五十）年に結成、毎月会を開くとともに雑誌『民俗宗教』（創樹社刊）一九八七（昭和六十二）年に第一集を出した。このような流れの中で一九七三（昭和四十八）年、筆者主催による仏教民俗研究会が結成された。

六　仏教民俗研究会

仏教民俗研究会の研究会記録と雑誌バックナンバー目次は別表に掲げる。初期は学生・院生の勉強会的色彩が強く、教育大の宮田登門下と立正大学の中尾暁門下の学生が中心となった。報告書はだせなかったが千葉県沼南町（現柏市）布瀬の調査を行った。坂本要の念仏信仰・渡浩一の地蔵信仰・武見李子の血盆経研究が牽引していった。また宮田登を招き、「仏教民俗の課題」、速水侑を招き「地蔵信仰」のシンポジウムを開催する。経典や縁起の講読会も開き、研究の幅を広げた。一旦休会の後第四十二回からは筆者の出身大学である埼玉大学文化人類学専攻の研究者原毅彦・吉野晃が中心になり社会学・人類学的傾向が強まった。また瀧善成という大正大学出身の老研究者が加わり助言を頂いた。第七号に追悼文と著作目録を載せる。雑誌は地蔵特集を組むと同時に高達奈緒美の血盆経研究が注目される。会員が地方大学に勤務したりして第二次の休会に至るが、第三次の最後の四回は会員が調査したアジア仏教民俗をめざす発表である。

七　再び仏教民俗

前述の五来重・宮田登の意見の違いは仏教民俗を日本民俗学や日本仏教史の欠落部の補完と位置づけるのか、独立した研究分野と位置づけるのかの問題であった。五来重は補完とするのであるが、仏教儀礼の民俗性に言及し新

たな研究対象を提示している。その辺の整理が必要ではないかというのが宮田登の主張であった。筆者は仏教民俗独立論に立つものである。仏教民俗という融合体は仏教でも民俗でもなく、仏教を第一とし、民俗を第二とすると、その融合で生まれた第三の別物ということになる。具体的に言うと修験道が、このいい例で密教・神道・陰陽道の融合から生まれながら、山中で偽死再生するという独自の教義を生み出している。この教義は変容というダイナミズム（動態）の中から生まれてきたもので、固有という概念では捉えられない。筆者の研究する民間念仏も浄土教の念仏と声を含む身体的呪術性との融合とで生まれた日本的念仏と言える。[13] このように仏教民俗をどれが仏教でどれが民俗だと分けるのではなく、独立した実態ととらえることが研究の出発点になる。

最近の仏教研究ではインド仏教・中国仏教・日本仏教はそれぞれ別の仏教ではないかとする考えがある。日本のように戒律が緩く妻帯を許す仏教が仏教といえるのかとする説である。仏教はゴーダマ・シッダールタ（Gautama Siddhārth）の教えでありながら、信仰ということになると仏像の例をみるように各地区の民族宗教や民俗を内包して創造されている。仏教はインドで始まって長い旅程を経て日本に伝わった。その過程でアジア各地区の民族宗教や民俗、さらには各時代の流行も習合している。このようなことから仏教民俗は比較民俗を前提として考えなくてはならない。前述の五来重・宮田登・藤井正雄による『歴史公論』の鼎談もそのような事で終わっていた。

註

（1）「盆と魂祭（仏教習俗の話1）」『聖愛』四―七号、高野山出版社、一九五〇年。
「盆と盆踊（仏教習俗の話2）」『聖愛』四―八号、高野山出版社、一九五〇年。
（2）鈴木昭英「解説」『五来重著作集　第一巻　日本仏教民俗学の構築』法蔵館、二〇〇七年）
（3）「日本仏教民俗学論攷」『五来重著作集　第一巻』（前掲）この著作集によってはじめて公刊された。

（4）大谷大学国史学会機関誌『尋源』に多くの後輩研究者の論考が乗る。五来重は国史学創立五十周年記念大会で「仏教民俗学の二十五年」を公演する。（『尋源』三一号、一九七九年所載）
（5）加藤章一「学会彙報」『仏教と民俗』一号、仏教民俗学会、一九五七年。
（6）谷川健一・伊藤幹治・後藤総一郎・宮田登編　第一号「特集　問いとしての柳田学」。
（7）福田アジヲ「柳田國男論の形成と展開」『現代日本の民俗学』吉川弘文館二〇一四年。
（8）『日本の民俗学』（講談社学術文庫一九七三年）は旧版で一九八五年（昭和六十年）に『新版　日本の民俗学』として刊行し、「仏教民俗」の項は書き改めてある。
（9）『歴史公論　特集　日本の民俗と仏教』五十二号雄山閣出版　一九五五年三月この経緯は藤井正雄「仏教民俗と五来重先生」『五来重著作集月報』一号に詳しい。
（10）藤井正雄「仏教民俗と五来重先生」前掲。
（11）この間の事情は福田アジヲ『日本の民俗学』吉川弘文館二〇〇九年及び竹田旦「思い出の史学方法論教室」『史学方法論教室閉室三十三周年記念の集い』パンフレット、二〇一〇（平成二十二）年）に詳しい。
（12）この間の事情は人の移動を含めて福田アジヲ「東京教育大学の廃学」『現代日本の民俗学』に詳しい。
（13）坂本要「日本的念仏の三円構造」『宗教民俗研究』一八号、宗教民俗研究会、二〇〇八年。

『仏教民俗研究』バックナンバー　目次

第一号（一九七五年四月）　ガリ版刷り

発刊の辞

論文

〈念仏特集〉

中興伝承と寺院復興　北村　敏
——茨城県勝田市稲田東聖寺の場合——

利根川中流域における念仏行事の分析　坂本　要

荻窪（神奈川県小田原市）の念仏講　西海　賢二

第二号（一九七五年一〇月）　以降プリント版

・論文

一遍智真の遺戒の教団史的意味　今井　雅晴

中世修験と虚空蔵信仰　佐野　賢治
——岐阜県高賀山信仰覚書——

オヒマチの性格と宗教者の役割　等々力貴子
——岡山県真庭郡新庄村——

・書評

倉林正次『祭りの構造—饗宴と神事—』　真野　俊和

三橋修『差別論ノート』　福島　邦夫

片岡弥吉・圭室文雄・小栗順子
『近世の地下信仰』　西海　賢二

佐藤宗太郎『石仏の解体』　坂本　要

斉藤昭俊編著『弘法大師伝説集』　北村　敏

第三号（一九七六年九月）

・論文

〈特集　女性と仏教〉

「血盆経」の系譜とその信仰　武見　李子

日蓮宗の女性祈禱師と祈禱講　山上　恵子
——千葉県中山法華経寺の場合——

長岡瞽女採訪記　福島　邦夫

・研究ノート
一遍智真の参籠　今井　雅晴
石動山天平寺と虚空蔵信仰　佐野　賢治
・書評
市古貞次・西尾光一『日本の説話』　杉岡　厚誌
速水侑『地蔵信仰』　渡　浩一
斉藤典男『武州御岳山の研究』　西海　賢二

第四号（一九七七年五月）
・論文
仏教民俗の課題　宮田　登
附　柳田國男　仏教民俗関係論文目録
〈特集　地蔵信仰　Ⅰ〉
民間地蔵信仰の一考察（上）　渡　浩一
――『今昔物語』地蔵説話を中心に――
『日本霊異記』における地獄説話と地蔵　杉岡　厚誌
地蔵信仰発表要旨及びコメント
（渡浩一・中島恵子・武見李子・坂本要・真野俊和・佐野賢治・杉岡厚誌・永濱真理子・清成純子・北村敏）
・研究ノート
古代の境界神　中村　英重
・書評
宮家準『日本宗教の構造』　今井　雅晴
安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』　西海　賢二
庚申懇話会編『日本石仏事典』　坂本　要
井之口章次『日本の葬式』　佐野　賢治
馬場あき子『鬼の研究』　福島　邦夫
桜井徳太郎編『山岳宗教と民間信仰の研究』　山上　恵子
三吉朋十『武蔵野の地蔵尊』他　田中　明
横井清『中世民衆の生活文化』　北村　敏

第五号（一九八〇年五月）
・論文
〈特集　地蔵信仰　Ⅱ〉

シンポジウム　地蔵信仰

（速水侑・報告　渡浩一　司会　北村敏　他）

平安末期民間地蔵信仰の構造　渡　浩一

——民間地蔵信仰の一考察（1）——

正元の「江戸六地蔵」　瀧　善成

「一万體印造地蔵感応記」（現巣鴨地蔵）について　田中　正明

地蔵関係主要参考文献目録

古代・中世前期地蔵説話一覧表

中世地蔵縁起・絵詞一覧表

・研究ノート

北海道開拓と尼僧　内野久美子

木食観正の東下をめぐって　西海　賢二

——民間宗教者と講集団（4）——

第六号（一九八九年九月）

・論文

仏教民俗のとらえ方　坂本　要

〈特集　近世仏教民俗史料　1〉

間引き図に見る子殺しの方法　久野　俊彦

——間引き絵馬等の類型と変遷——

「地蔵菩薩利益集」の世界　渡　紘一

——貞享・元禄時代の民間地蔵信仰——

資料紹介『血盆経和解』　高達奈緒美

——近世期浄土教における血盆経信仰——

第七号（一九九一年九月）

・論文

〈特集　近世仏教民俗史料　2〉

「無縁」の名をもつ書物達　浅野　久枝

——近世葬式手引書紹介——

東北大学狩野文庫『仏寺小志叢』目録　久野　俊彦

山伏神楽の伝承集団について　久保田裕道

——早池峰大償の民俗社会——

瀧善成先生のこと　坂本　要

瀧善成先生略年譜・主要著作目録

仏教民俗研究会記録

回	年月日	報告者と論題
1	1973-11	真野俊和「巡礼と堂宇」／坂本要「竹田聴州『民俗仏教と祖先信仰』の検討」
2	1973-12-02	宮本袈裟雄「儀礼面から見た堂の機能―佐渡相川の事例から―」／北村敏「堂と放浪者」
3	1974-01-20	山上恵子「祈祷師と堂宇」／村上久和「国東塔と堂宇」
4	1974-02-24	坂本要「念仏信仰について―栃木県佐野市の事例―」
5	1974-04-14	佐野賢治「虚空蔵信仰論」
6	1974-05-26	等々力貴子「雷神信仰」／杉岡厚誌「地獄絵について」
7	1974-06-27	安中聡「祖師堂について」／北村敏「行人塚について」
8	1974-07-25~27	千葉県沼南町布瀬地区調査
9	1974-09-27	梶山英一「人柱考」
10	1974-10-27	福島邦夫「越後瞽女について」
11	1974-11-05	千葉県沼南町布瀬地区調査　資料検討会
12	1974-12-01	今井雅晴「藤沢市遊行寺薄念仏について」
13	1974-12-22	千葉県沼南町布瀬地区調査　資料検討会
14	1975-01-10	千葉県沼南町布瀬地区調査　資料検討会
15	1975-01-25	西海賢二「五人組について」／真野俊和「四国遍路の霊験譚」
16	1975-02-16	紙谷威広「日蓮宗不受不施派における清僧について」／松本浩「唐代の斎醮」
17	1975-04-13	北村敏「日蓮の伝説」
18	1975-05-25	佐野賢治「東北修験と山岳信仰」
19	1975-06-29	千葉真一「歴史学と民俗学」／中込睦子「村づきあいの研究に向けて」
20	1975-09-28	宇津純「元三大師信仰の歴史」
21	1975-10-26	内野久美子「千葉県北部の子安講―鬼子母神信仰を中心に―」
22	1975-11-30	西海賢二「小田原市荻窪部落の念仏講・題目講―講集団の重層性について―」
23	1976-01-26	真野俊和「四国巡礼研究ノート」
24	1976-02-24	清成純子「国東半島の善神」
25	1976-04-25	千葉真一「農民一揆と民俗学」
26	1976-05-23	武見李子「血盆経（日本版）の分析的研究」
27	1976-06-26	永濱真理子「東北地方の即身仏信仰」／北村敏「入定伝承研究の可能性」
28	1976-07-24	仏教民俗の問題点―八月シンポジウムにむけて―」
29	1976-08-21	神楽坂八月シンポジウム：宮田登「仏教民俗学の課題」他
30	1976-09-26	渡浩一「地蔵信仰研究史」／中島恵子「泉龍寺廻り地蔵について」
31	1976-10-24	武見李子「地蔵と経典」／坂本要「浄土教と地蔵」／真野俊和「地蔵霊験記」
32	1976-11-28	杉岡厚誌「地蔵の説話」／佐野賢治「地蔵と十王信仰」
33	1977-01-23	清成純子「道祖神と地蔵―柳田国男『石神問答』をめぐって―」 永濱真理子「昔話、伝説にみる地蔵」
34	1977-02-27	北村敏「地蔵信仰と代受苦思想」／坂本要「地蔵和讃をめぐって」
35	1977-03-20~21	山中湖合宿：「八月シンポジウム総括」「地蔵信仰研究中間総括」
36	1977-04-26	文京区音羽会館：地蔵信仰シンポジウム、渡浩一・山上恵子・榎陽介
37	1977-05-29	渡浩一「今昔物語に見られる地蔵信仰」
38	1977-06-26	真野俊和・林譲・今井雅晴「中世の地蔵信仰（沙石集・地蔵霊験記）」
39	1977-07-31	坂本要「地蔵信仰の近世的展開」／福島邦夫「地蔵の民俗」
40	1977-08-21	北村敏「江戸随筆にみる地蔵」／榎陽介「地蔵とシャーマニズム」
41	1977-09-18	シンポジウム：地蔵信仰―速水侑先生を囲んで―
―― 休　会 ――		
42	1979-12-09	武見李子「八菅修験について」／渡浩一「小野篁と地蔵信仰」
43	1980-01-20	北村敏「入定塚について」／内野久美子「北海道開拓と尼僧」

回	年月日	報告者と論題
44	1980-02-17	原毅彦「三宅島の祖先崇拝」／浅野久枝「三宅島の無縁仏とエビス」
45	1980-03-13	福島邦夫「瞽女と境界性」／坂本要「講と遊山」
46	1980-04-13	小嶋博己「小巡礼と千葉」／林譲「遁世と黒衣」
47	1980-05-18	田中智彦「秩父巡礼の札所」／吉野晃「吉野裕子『陰陽五行と日本文化』書評」
48	1980-06-15	瀧善成「江戸六地蔵について」／岸本昌良「ムラの合祀―埼玉県北足立郡―」
49	1980-09-14	小松清「宮古島の墓制」／渡浩一「中世における地蔵信仰の伝承と普及」
50	1980-10-15	飯島功「山村の社会組織―秩父郡吉田町太田部―」
51	1980-11-30	村山道宣「青ヶ島の成巫儀礼」
52	1980-12-14	岩本通弥「屋敷・先祖・無縁・子供」／福原敏男「諏訪神社の祭礼について」
53	1981-01-18	白川琢磨「漁村の祭礼にみる象徴的社会」／福島邦夫「九州の盲僧について」
54	1981-02-15	秋葉好子「三宅記と民間念仏信仰の研究伝承」 鍋谷美幸「中国山地における牛神の研究」
55	1981-03-15	吉野晃「埼玉県北川辺柳生の念仏について」／岸本昌良「神社合祀の研究」
56	1981-04-24	有末賀「都市民俗の視点」
57	1981-05-31	鈴木正崇「海南島の民俗」
58	1981-07-05	北村敏「大田区の稲荷」
59	1981-09-20	坂本要「韓国の民俗」
60	1981-10-18	八海山修験者の活動」／「法華経輪読（１）」
61	1981-11-15	藤枝リンダ「東京都下町の都市民俗とその背景」／「法華経輪読（２）」
62	1982-01-16	由谷裕哉「能登の観音信仰」／「法華経輪読（３）」
63	1982-04-18	原毅彦・浅野久枝「花祭り」／「浄土三部経輪読（１）」
64	1982-05-16	新川英一「アメヤの民俗学的研究」／「浄土三部経輪読（２）」
65	1982-06-27	瀧善成「小野於通について」／「浄土三部経輪読（３）」
66	1982-09-19	朝倉敏夫「韓国南部都草島の民俗」／由谷裕哉「金剛般若経を読む」
67	1982-10-17	岸本昌良「大田区の神社をめぐって」／シンポジウム「大田区の民俗」
68	1982-11-21	曽士才「在日福建系華僑の盆行事について」
69	1982-12-19	大久保正明「三宅島の民間信仰と地理」
70	1983-01-16	古家信平「沖縄北部の霊的職能者」／榎陽介「新潟県山北町の年中行事」
71	1983-02-19	小川佳子「同族結合の今日的意味―川崎のジルイをめぐって―」 平野栄次「ヨーロッパの墓と教会」
72	1983-03-20	久野俊彦「蛇と蜈蚣の神戦譚の成立―両毛地方の日光山縁起と田原藤太の伝承―」
73	1983-05-15	牛島史彦「城下町の地蔵祭り―熊本市の事例―」／ 小嶋博己「俗信研究の予備的考察―概念の再構築にむけて―」
74	1983-06-19	古家信平・松本浩一「台湾南部の醮祭」
75	1983-07-17	馬淵悟「台湾アミ族の宗教」
76	1983-09-18	阿南透「鞍馬の竹伐会」／岸本昌良「韓国ソウルの旅」
77	1983-10-16	吉野晃「雲南地方の民俗」／岸本昌良「講読日本霊異記（上）」
78	1983-11-20	坂本要「台湾の普度行事」／渡浩一「講読日本霊異記（中）」
79	1983-12-25	西郷由布子「動物の文化史」
80	1984-01-22	坂本要「民俗学の位置づけについて」／福島邦夫「講読日本霊異記（下）」
81	1984-02-19	福島邦夫「大元神楽について」／坂本要「血盆経と十九夜念仏」
82	1984-03-18	西郷油布子「動物と文化」／牛山まほか「泉鏡花の世界―由縁の女―」
83	1984-04-22	北村敏「入定伝承再考」／高梨一美「当麻寺縁起」
84	1984-05-20	藤森裕治「日本民俗の焼畑文化的要素に関する考察」／坂本要「信貴山縁起」
85	1984-06-17	原毅彦「ペルーアマゾン」／渡浩一「粉河寺縁起」
86	1984-07-08	浮葉正親「親分子分と家連合―長野県下伊那郡上村下栗―」／原毅彦「ペルーアンデス」

回	年月日	報告者と論題
87	1984-09-16	坂本要「ガンダーラの仏教遺跡・中国雲崗の仏教美術」
88	1984-10-21	富田祥之亮「民間信仰と村落構造―徳島県神山町の例―」／岸本昌良「北野天神縁起」
89	1984-11-25	坂本要「京都万福寺普度勝会（１）」／浅野久枝「白山縁起」
90	1985-01-27	保坂達夫「マレビト　その２、３―折口信夫とその周辺―」／吉野晃「諸山縁起」
91	1985-02-17	中村博一「群馬県六合村の民俗」／坂本要「京都万福寺普度勝会（２）」
92	1985-03-31	樋口友二「猫のオントロジー」／岸本昌良「バリ島見聞記」
93	1985-04-21	神田より子「沖縄伊是名島の夏ウィミーについて」
94	1985-05-26	谷口貢「最近の柳田国男研究の動向」／浮葉正親「日光山縁起」
95	1985-06-23	林勲男「供儀される娘、出産する母神―輪島の二つの祭礼―」／吉野晃「タイ・チェンマイ」
96	1985-09-29	渡浩一「『延命地蔵菩薩直談抄』について」／網野房子「『山の神とオコゼ』をめぐって」
97	1985-10-20	小泉凡「民俗学よりみた小泉八雲」／坂本要「九品仏浄真寺の年中行事」
98	1985-11-24	飯塚好「群馬県六合村の家づくり」／渡浩一「赤穂市誓教寺の六道図」
99	1986-01-26	鈴木清訓「山形県のオカマサマ」／牛島史彦「城下町のフォークロア」
100	1986-02-23	浮葉正親「信州遠山谷の憑き祟りの信仰と神送り」／原毅彦「ボリビアアンデス」
101	1986-04-27	渡浩一「直談抄の説話」
102	1986-05-25	山田厳子「血塊の諸相」
103	1986-06-22	有馬洋太郎「北関東平野農村の休日の変遷」／坂本要「万福寺の開山忌」
104	1986-09-21	岸本昌良「千躰荒神の民俗」／西郷由布子「インド旅行記」
105	1986-10-25	シンポジウム「仏教民俗学史」:谷口貢「柳田国男と仏教民俗」／保坂達夫「折口信夫と仏教民俗」／坂本要「柳田国男以前の仏教民俗」
106	1986-11-16	池田雅治「位牌祭祀研究に向けて」／網野房子「観音信仰について」
107	1987-01-25	岸本昌良「工場の民俗」／石井奈緒「新宗教中山身語正宗について」
108	1987-02-15	野地恒有「飛び魚をめぐる民俗」／浅野久枝「清瀬の民俗」
109	1987-03-15	塩入伸一「浅草寺の温座陀羅尼」
110	1987-04-19	萩原左人「死者供養と肉食」／渡浩一「往生要集講読（１）」
111	1987-05-24	小池淳一「下北半島の修験系説話伝承」／坂本要「往生要集講読（２）」
112	1987-06-14	喜山朝彦「シャーマンとプリーストをめぐる社会関係」／大久保正明「マレーシアの旅から」
113	1987-07-19	神田より子「陸中沿岸地方の神楽の宗教的世界」
114	1987-09-27	杉井純一「日蓮宗の祈禱法と民俗信仰」／渡浩一「韓国の旅から」
115	1987-10-18	高田峰夫「琉球地方における命名法の問題」／北村敏「羽田穴守稲荷の展開」
116	1987-11-22	坂本要「地獄の系譜」／高達奈緒美「『血盆経和解』について」
117	1988-01-24	古家晴美「念仏講の二つの輪」／高田峰夫「出羽三山講のボンデン立て」
118	1988-02-28	浅野久枝「無縁と御霊」／渡浩一「台湾の廟巡り」
119	1988-03-20	荒島聖宏「真言密教の儀礼」／網野房子「観音信仰のフォークロア」
120	1988-04-24	坂本要「明治の風俗学」／原毅彦「ペルー高地の人類学」
121	1988-05-22	浅野久枝「版本『無縁双紙』の紹介」／大久保正明「パキスタンの旅から」
122	1988-06-19	坂本要「ダルマの変遷」／小池淳一「下北半島の寺院絵画」
123	1988-10-30	及川宏幸「宮城県箆峯寺の白山会と信仰」／市川宏明「近世的社会の成立と民衆意識」
124	1988-11-27	岸本昌良「千躰荒神の民俗」／坂本要「タイの旅行から（１）」
125	1989-02-26	坂本要「プレータと施餓鬼」「タイの旅行から（２）」
126	1989-04-23	上野誠「もう一つのドラマ―川名の火ヨンドリ」／福原敏男「社寺参詣曼荼羅」
127	1989-06-04	松尾恒一「中世修正会儀礼と呪師・法呪師」／大久保正明「エジプトの旅から」
128	1989-07-02	監物なおみ「八重山黒島の東西南北」／渡浩一「川崎の地獄絵」
129	1989-09-24	石川博「読み本にあらわれた仏教観」／岸本昌良「新しい祭り―区民祭を例に」

回	年月日	報告者と論題
130	1989-10-29	高橋晋一「台湾の王爺信仰」／笹原亮二「韓国の旅から」
131	1989-11-19	中野優子「地域社会における寺院の機能―新潟県五頭山華報寺と優婆尊信仰―」／坂本要「川崎の寺社行事」
132	1990-02-28	松尾恒一「延年のドラマツルギー」／坂本要「長野県栄村の小正月と芸能」
133	1990-03-18	岸本昌良「新潟県の能生の神楽」／久野俊彦「富士山の里修験」
134	1990-04-29	久保田裕道「岩手県大迫の大償神楽」／吉野晃「タイ北部ヤオ族の葬送儀礼（1）」
135	1990-05-27	橋本祐之「王の舞の解釈学ノート」／坂本要「聞き書きの系譜」
136	1990-06-18	片茂永「八関会―韓国の仏教民俗について―」／吉野晃「タイ北部ヤオ族の葬送儀礼（２）」
137	1990-09-09	関口静雄「叡尊作文文珠講式について」／高達奈緒美「イタリアの旅から」
138	1990-10-28	田中斉「山姥信仰試論」／浅野久枝「韓国の旅から」
139	1990-11-18	山本有子「四天王像の展開」／荒井和美「栄村のトリアゲオヤ」
140	1991-01-27	平野栄次「キリスト教奇跡の聖地」／高達奈緒美「仏教民俗関係史料１、２」
141	1991-02-24	石井奈緒「御蔵島の分家制限―過去と現在」／池田雅治「群馬県六合村の位牌分け慣行」
142	1991-03-17	福原敏男「鐘馗・疫病・端午の節句」
143	1991-04-21	七尾由紀子「山村における民俗の変容―岩手県宮古市長沢目地区の場合」／松尾恒一「室町期興福寺修正会の祭祀組織と経済基盤」
144	1991-05-19	川越仁恵「藁馬考―年中行事に見る藁馬」／坂本要「大山街道実施調査」
145	1991-06-23	水久保克英「近世における甲州郡内領大工仲間について」／小谷能久「有と空とヨーガ」
146	1991-09-22	横芝昌子「香典帳の基礎的研究―武州多摩郡連光寺村の例―」／坂本要「甲州秋山村の六斎念仏」
147	1991-10-27	高野良徳「法華三十番神小考」／高田峰夫「バングラデッシュの村から」
148	1991-11-17	中野泰「つきあい祭りの考察」
149	1992-05-17	蕭紅燕「志摩地方の両墓制」／三浦久美子「埼玉県南部の異種墓地慣行」
150	1992-06-21	岡谷典子「川崎の妖怪譚」／福原敏男「市神について」
151	1992-09-27	新井高子「観光と社会変化―岩手県宮古市の例―」／佐藤圭子「葬送儀礼と親族概念―岩手県宮古市の例―」
152	1992-10-18	阿南透「黄金の避雷針―宮古市のうわさ話―」／樽永「真如苑と周辺地域」
153	1992-11-15	浮葉正親「村争いと村八部のフォークロア」／坂本要「富士山麓の祈祷念仏」
―― 休　会 ――		
154	1999-05-30	高達奈緒美「血盆経信仰の諸相」／加藤紘子「安積開拓移民の文化変容」
155	1999-07-04	中野泰「シロバエ考―山口県萩市漁民の自然認識―」／鈴木美和子「『サザエさん』と『コチ亀』に見るハエとゴキブリの社会史
156	1999-09-12	小野寺節子「音を視点とした民俗研究とその方法」
157	1999-10-31	荒井和美「本郷の下宿と旅館」／伊藤敦規「迎える側からの巡礼―瀬戸内海豊島―」
158	1991-11-28	西郷由布子「芸を司どる者―東北地方における風流踊りの道化者の系譜―」
159	2000-01-30	菅根幸祐「関東地方の空也堂」
160	2000-03-05	綿貫真理「能の囃子と近代」／コメント　西瀬英紀
161	2000-05-21	ダンカン・ウイリアムス「近世曹洞宗の治病」
162	2000-06-18	坂本要「しゃがむ念仏」／岸本昌良「石橋臥波の民俗学」
―― 休　会 ――		
163	2007-09-30	坂本要「ラオスの壁画寺院」
164	2007-12-09	久保田祐道「ブータンの仮面舞踊」
165	2008-03-15	田森雅一／福原敏男「西北インド・ラジャスタンの絵解きポーパ」
166	2008-05-18	蔡文高「東南中国漢族の死者儀礼と死生観」